

第2章 甲府城跡の概要

第1節 指定に至る経緯

甲府城跡は、明治時代以降の建造物の撤去、果樹試験場、鉄道開通、博覧会開催、太平洋戦争、都市近代化の中で大きな変貌を遂げてきた。中でも最大の特徴である石垣は、コンクリート積みや間地積みへと改変を受け、本来の姿から大きく変化した。また、青少年科学センターを初めとする諸施設や、記念碑の建立も歴史景観の変貌に大きな影響を与えてきた。

そこで、本来の姿から大きく変わる甲府城に対して、保存に関する気運が高まった。昭和43年に県指定史跡となり、翌44年には県教育委員会が、甲府城の歴史と将来あるべき姿を多角的な視点からまとめた『甲府城総合調査報告書』を刊行し、その後の甲府城跡の取扱いに大きな方向性を与え画期となった。平成2年から始まる舞鶴城公園整備事業の基本計画も、『甲府城総合調査報告書』の考え方を基本に作成され、現在の方針も基本的にはこれを踏襲している。

また、甲府城に石材を供給した、城外の石切場と考えられている愛宕山石切場については、平成21年11月12日に「甲府城跡愛宕山石切場跡」として県史跡に指定された。

平成26年5月19日、山梨県考古学協会と山梨郷土研究会の連名により、「県指定甲府城跡の国指定史跡にむけて」とする要望書が山梨県知事と山梨県教育委員会教育長に提出された。

このような経緯の後、山梨県は平成30年6月から7月にかけて史跡指定計画地内の地権者から史跡指定の同意を得て、平成30年7月31日、史跡指定の意見を具申し、同年10月19日、文部科学大臣が文化審議会に史跡指定を諮問、同年11月16日、文化審議会が文部科学大臣に史跡指定を答申、平成31年2月26日、官報に史跡指定が告示された。

第2節 指定の状況

1. 指定告示

名称	甲府城跡(こうふじょうあと)
種別	史跡
指定年月日	平成31年2月26日(文部科学省告示第20号)
所在地	山梨県甲府市丸の内一丁目49外 27筆 等
指定地面積	66,567.24㎡
指定基準	特別史跡名勝天然記念物及び史跡名勝天然記念物指定基準(昭和26年文化財保護委員会告示第2号) 史跡の部二 都城跡、国郡庁跡、城跡、官公庁、戦跡その他政治に関する遺跡

2. 指定説明文とその範囲

甲府城跡は、山梨県甲府市の中心部に位置し、外縁山地から甲府盆地に流れ込む小河川により形成された扇状地と沖積低地の境界部に分布する小丘の一つ、一条小山（標高約 300m）と呼ばれる比高約 30mの独立丘陵に築かれた、近世の平山城跡である。築城以前、この地には武田信義子息の武田（一条）忠頼の屋敷があったと伝え、14 世紀には時宗の一蓮寺が建立されたが、武田信虎が躑躅ヶ埼に館（史跡武田館跡）を整備するに際して同寺を移転させ、砦を築き甲府の南側の防衛拠点としたとされる。

天正 10 年（1582）の甲斐武田氏滅亡後、甲斐国は織田信長領となったが、直後に勃発した本能寺の変後は徳川家康が支配し、重臣の平岩親吉が置かれた。小田原攻めを控えた天正 17 年（1589）1 月、家康は甲斐防衛強化のため一条小山での城普請を計画したが、結局、豊臣秀吉の小田原出兵によって中止されたと思われる。天正 18 年（1590）関東平定によって家康が関東に移されると、甲斐は豊臣方支配地となり、関東の徳川氏を抑える豊臣方の拠点として重要視された。

天正 18 年に羽柴秀勝が、翌 19 年（1591）から文禄 2 年（1593）まで加藤光泰が、光泰没後の文禄 3 年（1594）から慶長 5 年（1600）までは浅野長政・幸長親子という、豊臣一門や有力武将が甲斐に配され、この豊臣支配期に順次、甲府城造営が進められ、慶長 5 年頃までに完成したとされている。ただし、発掘調査では羽柴・加藤氏が築城に関与したことを示す遺物等が確認されず、築城期の家紋瓦が浅野氏ものに限られることや、羽柴・加藤氏による城普請の資料の史料は躑躅ヶ埼の館のこととする解釈もある。従って、甲府城の本格的造営は浅野時代とことと考えられる。

関ヶ原の戦いで家康が勝利すると、浅野氏が紀伊に移り、甲斐は再び徳川直轄領となり、平岩親吉が城代として城の修築を行ったが、慶長 8～12 年（1603～1607）に徳川義直（家康 9 男）が、元和 2～9 年（1616～1623）には徳川忠長（二代将軍秀忠次男）といった徳川一門が甲斐国主となり、甲府には城代が置かれた。それ以外の期間は城番制が敷かれて維持管理された。寛文元年（1661）、徳川綱重（三代将軍家光 3 男）が甲斐城主となって本格的に甲府藩が立てられ、同 4 年（1664）には城の大改修が実施され、稲荷櫓等が再建された。次の綱豊（綱重長男。後の 6 代将軍家宣）は宝永元年（1704）5 代将軍綱吉の養子となったため、柳沢吉保が武蔵川越から 15 万石で甲府藩主となった。翌年から柳沢氏による大規模な城の改修が行われ、藩主の居館である屋形御殿等を新たに構え、城の北側に花畑曲輪が造られ、建物や曲輪や城下町の名称の改称が実施され（『楽只堂年録』、城下町の整備も進められた。しかし、京保 9 年（1724）柳沢氏は大和郡山に転封となり、享保 12 年（1727）の大火で本丸御殿をはじめ建造物は焼失した。甲府城は幕末の慶応 2 年（1866）まで甲府勤番支配が、その後明治維新まで甲府城代が置かれたが、明治元年（1868）、新政府軍に接収された。近代、建物や石垣の解体、濠の埋め立て土地の払い下げ、中央線の敷設等によって城跡の改変は進んだが、城跡中枢部分は昭和 43 年に山梨県指定史跡となり、舞鶴城公園整備事業として石垣解体修理、稲荷櫓・鉄門等の復元が行われ、利活用されている。

山梨県教育委員会では、甲府城跡保護に向けた取組みが必要と捉え、昭和 42～43 年度に甲府城総合学術調査団に委嘱する形で調査研究を行い、昭和 44 年に『甲府城総合調査報告書』をとりまとめた。また、平成 2～15 年度の舞鶴城公園整事業に伴い、山梨県埋蔵文化財センターによって城跡の発掘調査や文献調査等が行われた。

甲府城の縄張りは、本丸・二の丸等で構成される内城、二の堀で圍繞され、武家地が展開した内郭（郭内）、三の堀で圍繞され、町人地等の城下町が展開していた外郭からなるものであった。内郭部分の縄張りは、丘陵頂部の本丸を中心として、その周囲に天守曲輪、稻荷曲輪、数寄屋曲輪、鍛冶曲輪といった複数の曲輪を階層的に配置するもので、本丸の西側下の帯曲輪を挟んで二の丸を置く。二の丸西南には楽屋曲輪、西北に屋形曲輪、その北には清水曲輪をそれぞれ設け、楽屋曲輪の南虎口として追手門が、西虎口として柳門が、清水曲輪の北虎口として山之手門がそれぞれ開く（曲輪・門の名称は柳沢時代による）。これらの曲輪群を内堀で取り囲むものであり、現在、ほぼ二の丸より城郭遺構が良好に遺存している。

各曲輪の城壁は総石垣造りであり、本丸・本丸天守台・稻荷曲輪周辺を中心に、築城期の野面積み石垣が残存し、貴重である。横目地が通らない乱積みがほとんどであるが、布崩し積みも所々にみられる。また、鉄門等要所には鏡石を用いている。隅角部は算木積みを意識した積み方が確認できるが、不規則に乱れ、隅脇石も多様である。隅角部には稜線を出すためのハツリ痕跡が見られる等の特徴を観察できる。

本丸の発掘調査では、鉄門・銅門の遺構や暗渠を検出した。本丸東側には天守台が残るが、攪乱が著しく建物の存在は確認できなかった。稻荷曲輪では底部床面に石材を敷いた地下構造をもつ築城期の煙硝蔵を検出し、稻荷櫓台では綱重・織豊期の櫓建築時に地鎮に使用した輪宝が出土した。本丸・天守曲輪では、築城時に地盤補強のため施工された、城壁と並行もしくは直行する地中石垣が見つかった。また、本丸・数寄屋・鍛冶の各曲輪で、石切場遺構を検出した。一条小山は安山岩の岩盤であり、築城時には石材を現地調達したものであり、鍛冶曲輪では露出した岩盤に矢穴が確認できる。鍛冶曲輪では米蔵建物の基礎を検出したほか、鎌倉時代末から室町時代の井戸が見つかり、築城以前の一蓮寺との関係が示唆される。遺物として、土器類、石製品、瓦、金属製品、木製品等が出土した。瓦類は多量に出土し、築城期の所用瓦と考えられる金箔の鯨瓦や鬼瓦、浅野氏や柳沢時代の家紋瓦も含まれる。屋形曲輪では挟間の部材が出土した。また、平成19年に城跡の北東に接する愛宕山の山裾部において行われた調査によって、安山岩露頭に近世期の矢穴を確認した。関係する史資料から判断して、甲府城築城に伴う石切場であると考えられることから、平成21年に甲府城愛宕山石切場跡として山梨県指定史跡になっている。

このように、甲府城跡は、豊臣政権下、関東の徳川氏に対する抑えとして築かれ、江戸時代には徳川一門・甲府藩の居城ともなった城跡である。東日本における初期段階の織豊系城郭であり、築城期の野面積み石垣が良好に残存するとともに、天守台を最頂部とした階層的な縄張り構造も良く残る。織豊期の政治・軍事の状況と当時の築城技術を知る上で重要である。よって、本丸等主要な曲輪が所在する舞鶴城公園地と、公園地に南接する楽屋曲輪沿いの堀跡、それに愛宕山石切場跡を加えた範囲を史跡に指定して、その保護を図ろうとするものである。

3. 指定地の状況

(1) 土地所有状況

史跡指定地の土地所有状況は以下の表のとおりである。

表 指定地の地番・所有者等一覧表

所有者	地目	面積	面積比率
国有地	宅地・池沼	1,636.92 m ²	2.50%
県有地	公園・宅地	64,126.39 m ²	96.3%
甲府市有地	水路敷	12.20 m ²	0.02%
民有地	宅地	791.73 m ²	1.18%
合計		66,567.24 m ²	



図 史跡指定地内の土地所有関係

(2) 管理団体の指定

令和2年3月10日付け、文化庁告示第30号で甲府城跡を管理すべき管理団体として山梨県が指定されている。

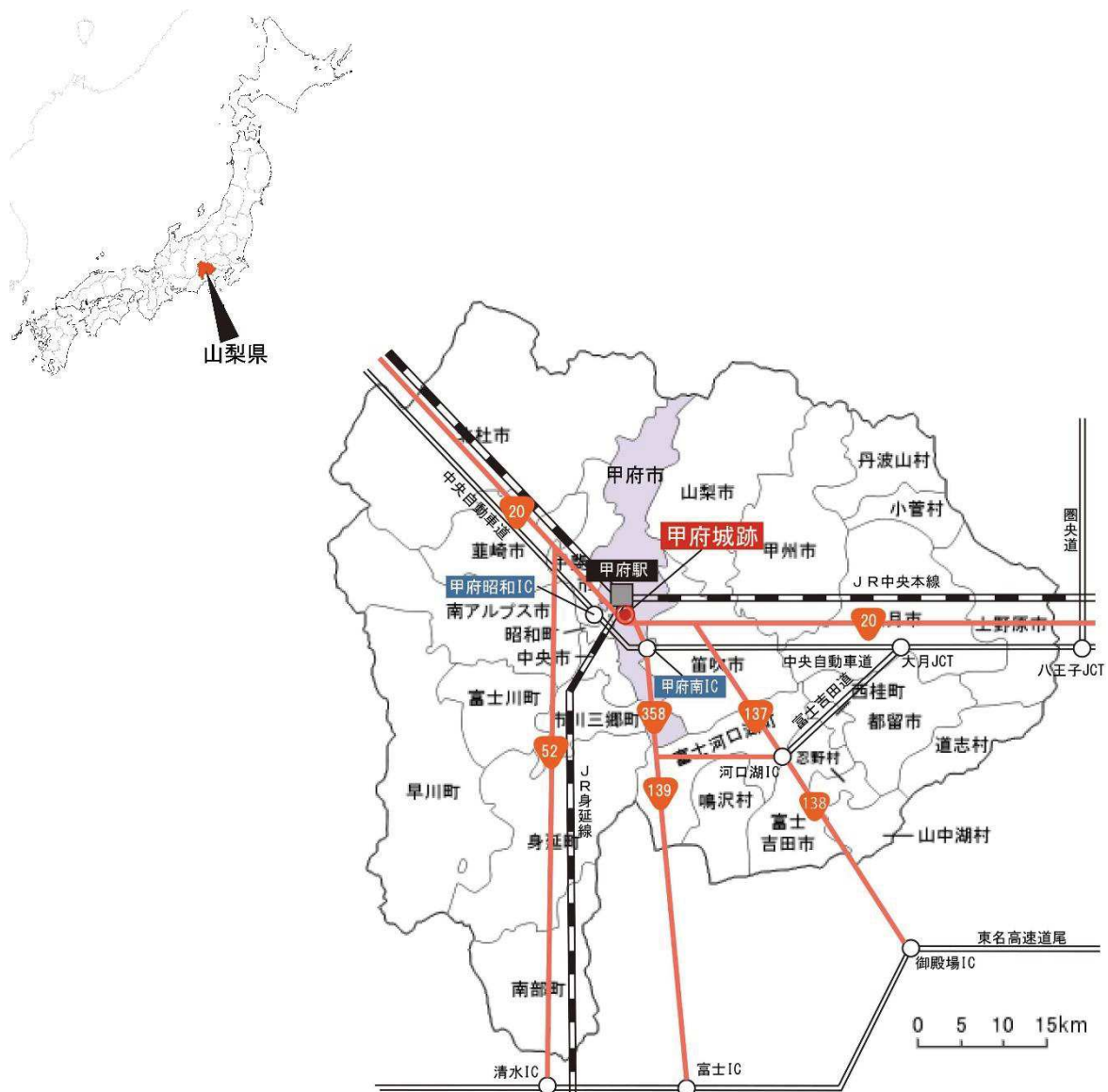
第3節 甲府城周辺の環境

1. 社会的環境

(1) 位置と交通

甲府城跡が所在する甲府市は、山梨県のほぼ中央部に位置する。山梨県の県庁所在地であり、中核市に指定されている。市域は南北に細長く南側に御坂山地、北側に関東山地があり中央部に広がる甲府盆地に市街地や住宅地、農地が広がっている。

甲府城跡は甲府駅南側の市街地中心部に位置している。史跡への交通は鉄道を利用するか、自動車（自家用車、観光バス等）が主である。鉄道利用の場合は、JR中央本線・身延線甲府駅で下車し、甲府駅南口から徒歩2分である。自動車の場合は、甲府昭和 IC（中央自動車道）、甲府南 IC（中央自動車道）が最寄りインターチェンジとなっている。駐車場は舞鶴城公園（史跡甲府城跡）駐車場が北側と南側に存在するが、観光バスおよび身障者用となっており、自家用車は周辺の有料駐車場への案内を行っている。



甲府城位置図（広域）



甲府城跡位置図（周辺）

(2) 史跡指定地および周辺の土地利用状況

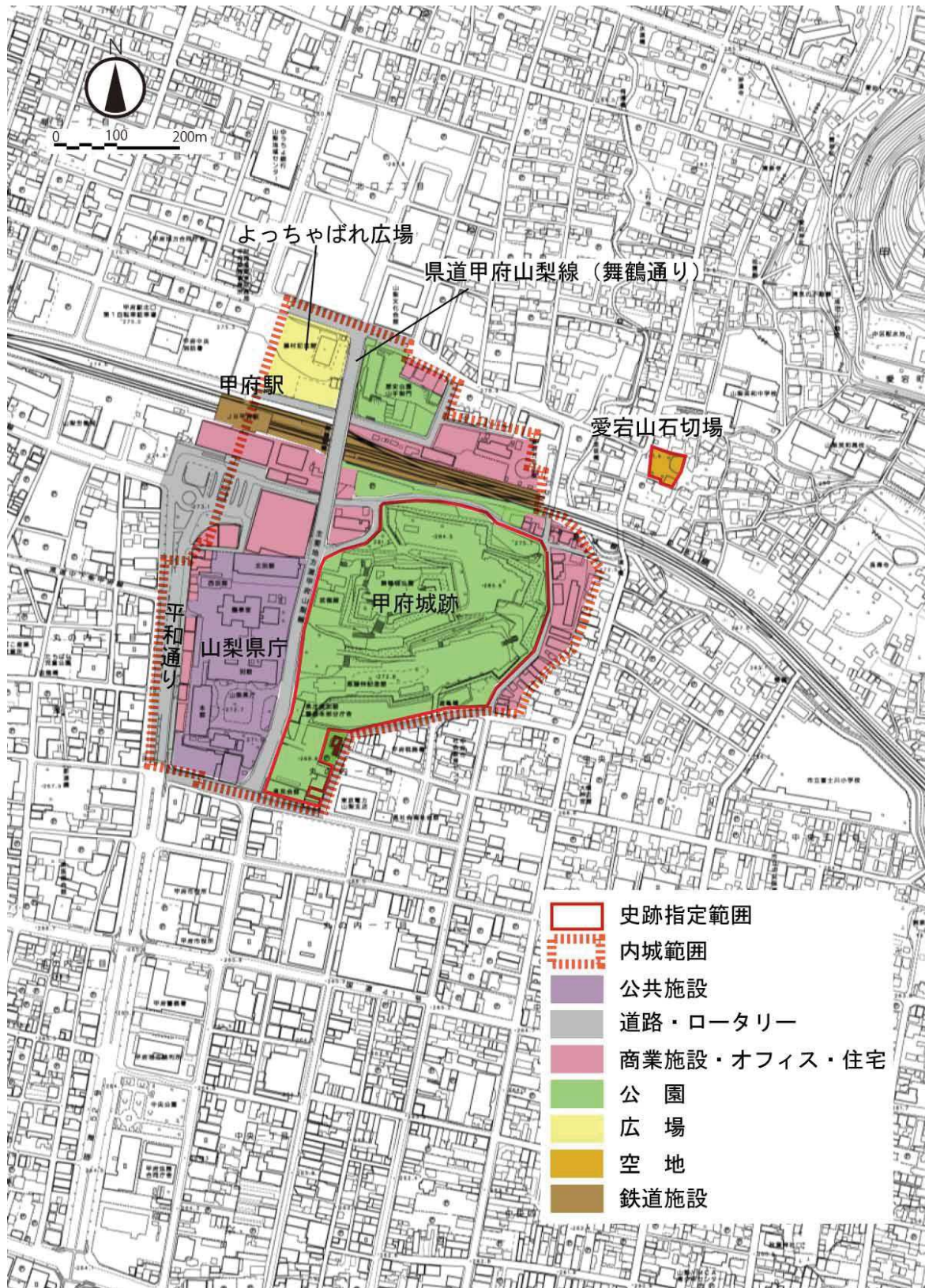
甲府城跡は舞鶴城公園として都市計画公園となっている。舞鶴城公園は明治37年(1904)に開園し、以来、多くの県民の憩いの場となっている。

愛宕山石切場は第二次世界大戦以前、甲府市内の製糸業者の別荘「愛宕山荘」であった。戦後は甲府地方裁判所の所長官舎が置かれたが、平成15年(2003)に移転した。現在は空地となっており、愛宕山荘以来の庭園の跡が残されている。

なお、「第1章第5節他の計画及び法令」で述べたように、甲府城跡は南側一部を除き風致地区となっている。周辺は甲府駅南側の市街地中心部であり、甲府市のメインストリートである「主要地方道甲府韮崎線(平和通り)」沿いに多くの商業施設が立ち並び、史跡指定地に隣接して山梨県庁の庁舎が存在する。甲府市役所も近隣に位置しており、山梨県および甲府市の行政拠点となっている。都市計画上の用途地域は商業地域である。愛宕山石切場も風致地区(愛宕山風致地区)内に位置し、周辺は住宅地である。都市計画上の用途地域は第1種住居地域である。



史跡内の土地利用状況図



内城内の土地利用状況図

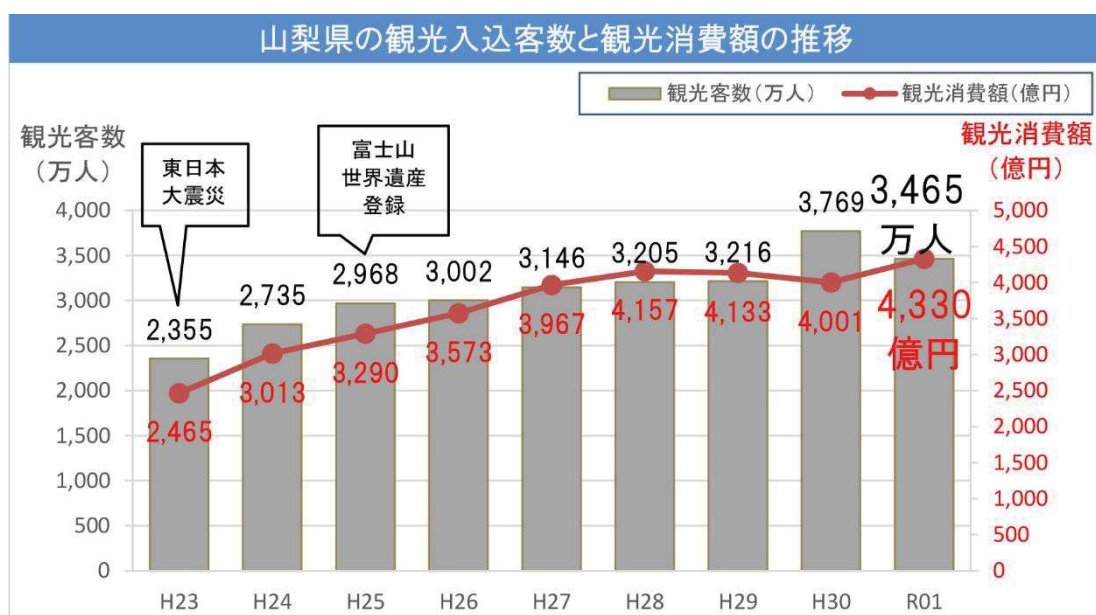
(3) 観光

甲府市は武田時代の中世城下町（古府中）と江戸時代の近世城下町（新府中）という異なる時代の街を伝えつつ県都として発展してきた。市内には甲府城跡・武田氏館跡の史跡や地域固有の文化資産が随所に残され、ギネスブックで世界最大の武者行列として認定された「信玄公祭り」や「種をまく人」など世界的なミレーコレクションで知られる県立美術館など特色ある祭りや観光施設が存在する。舞鶴城公園としても親しまれてきた甲府城は、駅に近接した緑豊かで風格ある歴史景観と都市景観が調和した居心地が良い、賑わいのある空間づくりが進められている。

「オープン県庁敷地整備計画」に基づき県庁敷地は、甲府駅周辺や商店街周辺などの都市的な空間と甲府城などの歴史・文化的資源とをつなぐゾーンとして位置づけられることから、山梨県防災新館地下に「甲府城石垣展示室」を整備し、甲府城を近く感じさせ、訪れたい空間づくりを行ってきた。また、「山梨近代人物館」として山梨県庁舎別館の活用を図ってきた。

また、「やまなし観光推進計画」では、令和3年（2021年）の信玄公生誕500年を甲斐の国山梨の歴史・文化を多くの人に知っていただく絶好の機会と位置付けている。その翌年は「信玄公まつり」が第50回の節目の年となり、全国的に著名で多くのファンを持つ信玄公や「サムライ」・「歴史」などは、世界から見た「日本」のイメージを構成する主要な要素として、増加する外国人観光客に対してもアピールしやすいと考えられる。

平成23年には「おもてなしのやまなし観光振興条例」を制定し、県民一丸となって観光振興を図っていくこととした。平成24年には「やまなし観光推進計画」を、平成28年には「やまなし観光産業活性化計画」を制定し、おもてなしの推進、インバウンド促進、観光産業の活性化等を実施してきた。その結果、平成29年の観光入込客数3,216万人（平成22年と比べ125%増）、観光消費額4,133億円（平成22年度と比べ162%増）となり一定の成果を得ている。



「令和元年山梨県観光入込客数統計調査報告書」より抜粋

(4) 周辺の関連施設

史跡甲府城跡に関連する施設として以下のものがある。

1) 甲府城石垣展示室

山梨県防災新館の地下1階に存在する。平成22年(2010)9月から行われた防災新館の建設工事に伴う発掘調査によって発見された甲府城楽屋曲輪南西部に位置する内堀の石垣(東西幅27m、高さ最大4m)の一部を移築保存し展示している。

甲府城の石垣や歴史について説明する映像も観ることが出来る。

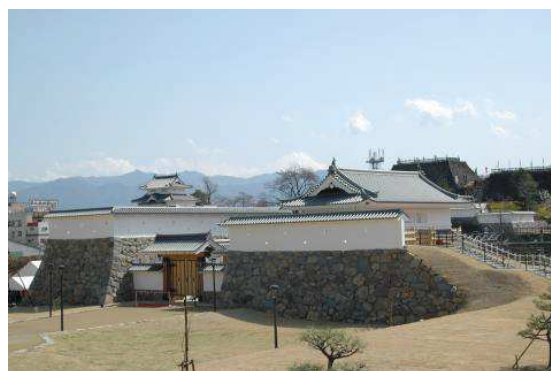


防災新館 石垣展示室

2) 甲府市歴史公園山手御門

平成10年の発掘調査で、石垣の一部が発見され、甲府市により山手門の復元を中心とした公園整備が行われた。平成19年3月に完成し、現在は一般開放されている。

山手渡櫓門の中は展示室になっており、発掘調査で出土した瓦や陶磁器、山手渡櫓門のミニチュア模型、江戸時代の歴史資料が展示されている。



甲府市歴史公園山手御門

3) 武田氏館跡

武田氏館跡(国指定史跡)は、織豊期以前に甲斐を治めた武田氏の本拠となった城郭である。永正16年(1519)に武田信虎によって築かれ、信虎、信玄、勝頼の武田氏三代が居住した。館建設に伴い城下町(武田城下町)の整備も行われ、現在も街割りされた街路の道筋が残されている。堀と土塁に囲まれた方形の曲輪が連なる平城で、武田氏滅亡後に甲斐国の統治拠点として織田・徳川・豊臣氏の家臣団によって再利用され、甲府城築城が一応の完成を見るまで使用されたと考えられている。主郭部には大正時代に武田神社が創建された。甲府市により整備事業が進められ、大手石塁が復元された他、ガイダンス施設「甲府市武田氏館跡歴史館」が平成31年4月5日にオープンした。



武田氏館跡



甲府市武田氏館跡歴史館

2. 自然的環境

(1) 地形

日本列島を横断している糸魚川・静岡構造線の西方には、西南日本を走る東北東－西南西の山系が北東から北に方向を変え、南アルプスの赤石山脈となって分布している。また、山梨県北東部の関東山地は、東北日本の特徴である南北の方向から山梨県近くになり山系の延びが東西方向に変わり、山梨県内では甲府盆地を北から囲むように変則的な山系の走りをしている。一方、甲府盆地南部の御坂山地は、東北東－西南西の走りが盆地の南部において南北方向の天子山地に折れ曲がって連なっている。この折れ曲がりの真ん中を裂くように北西、南東方向に八ヶ岳、富士山が位置し、大きな火山の山麓が広がっている。そしてその中間部に三角形の甲府盆地がある。

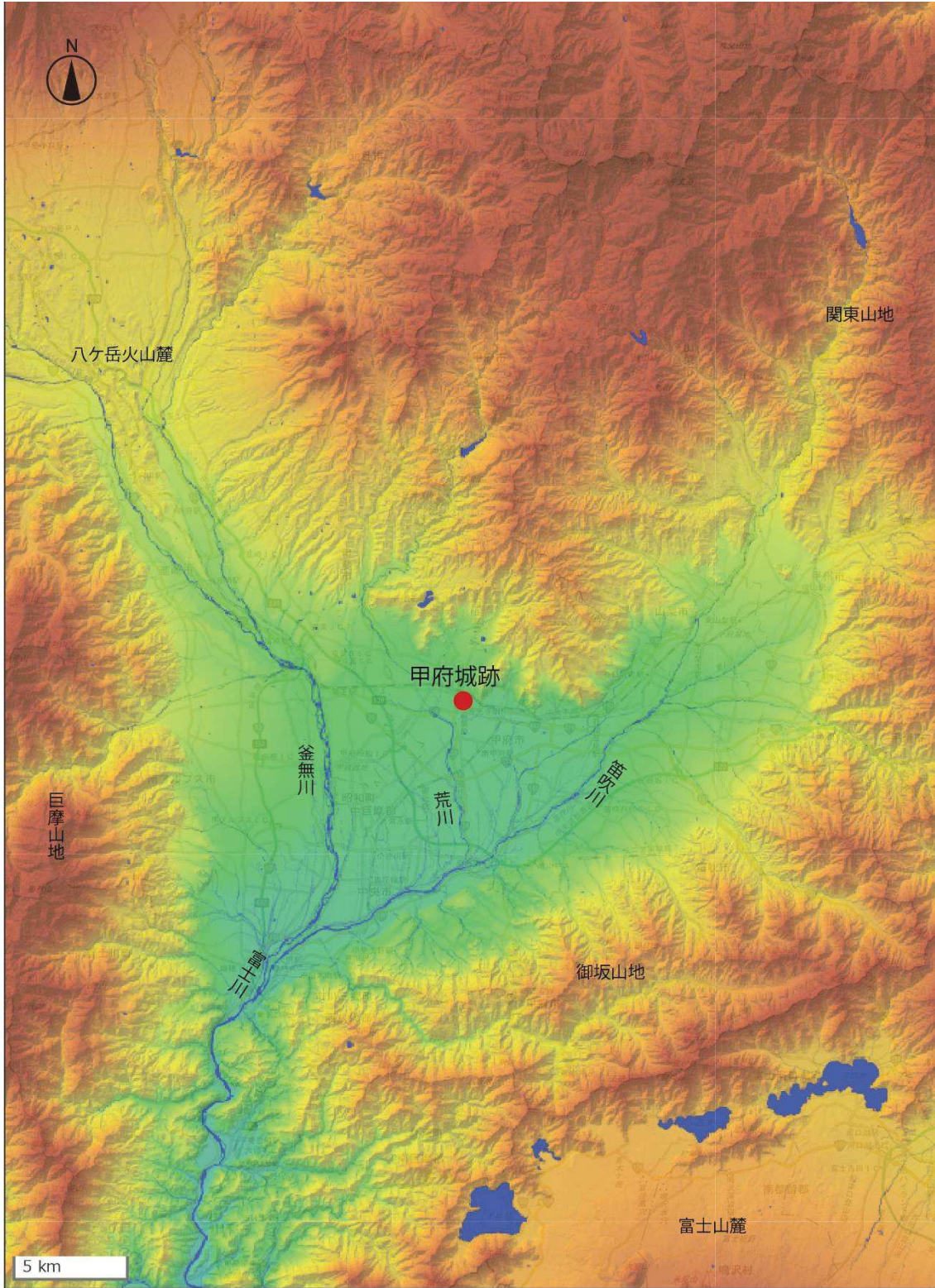
山梨県の地形区分で 3000～ 2000m 級の高い山地は、山梨県最西部の県境である赤石山地、最北部の県境である秩父山地地域である。2000～ 1000m 級の山地は、甲府盆地の北側に位置する北山山地、西方の巨摩山地、南方の御坂山地、県東部の道志山地、秋山山地、富士川沿いの身延山地、天子山地地域である。北西には八ヶ岳の火山と山麓地、南東には富士山と山麓地が広がっている。甲府盆地西端、南東端には丘陵性台地がある。

甲府城跡は甲府盆地の中央北側に位置する。甲府盆地は、北を八ヶ岳・茅ヶ岳の火山群、東を大菩薩嶺の山塊、南を御坂山地、西を南アルプスの峰々に囲まれた内陸盆地で東西約 20km、南北約 10km の東西に延びたくさび型をなしている。

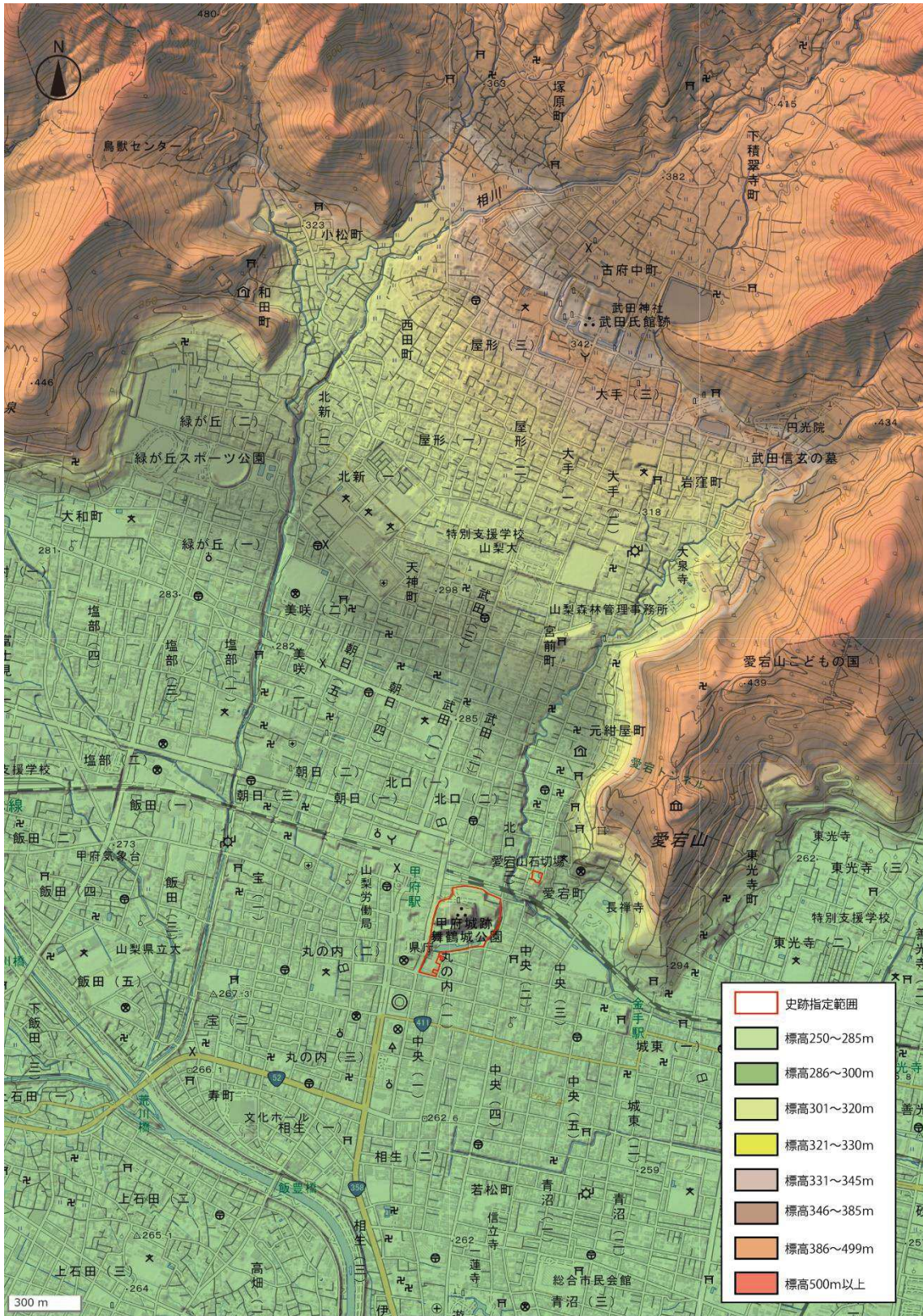
標高は、盆地東部の塩山で 400m、石和で 270m、甲府で 260m、西部の竜王で 280m、南部の田富で 250m となり東部及び北部で高く、盆地の南西端に向かって緩く傾斜した地形を示している。また、甲府盆地は八ヶ岳より南に流下する釜無川と、甲武信岳より南西に流下する笛吹川の二大河川及びそれらの支流によって形成された複合扇状地である。

釜無川や笛吹川の支流である御勅使川、荒川、金川、日川、天川等が盆地周縁の山地を開析してその山麓に扇状地を形成しているが、甲府盆地の扇状地の形成は、主として釜無川と笛吹川の運搬堆積作用によるものである。この二大河川は、盆地の南西端で合流し、富士川となって南下する。それと共に盆地は消滅する。

甲府城跡は荒川・相川により形成された扇状地の扇端付近にあり、沖積低地との境界付近に位置する。北に向かい緩やかに高くなる平坦地に鍛冶曲輪、楽屋曲輪、清水曲輪、花畑が配され、本丸、天守曲輪、二の丸、稻荷曲輪、数寄屋曲輪は一条小山と呼ばれた独立丘上に配置されている。



甲府盆地の地形
 ※国土地理院地図を加工し作成



甲府城周辺の地形

※国土地理院地図を加工し作成

(2) 地質

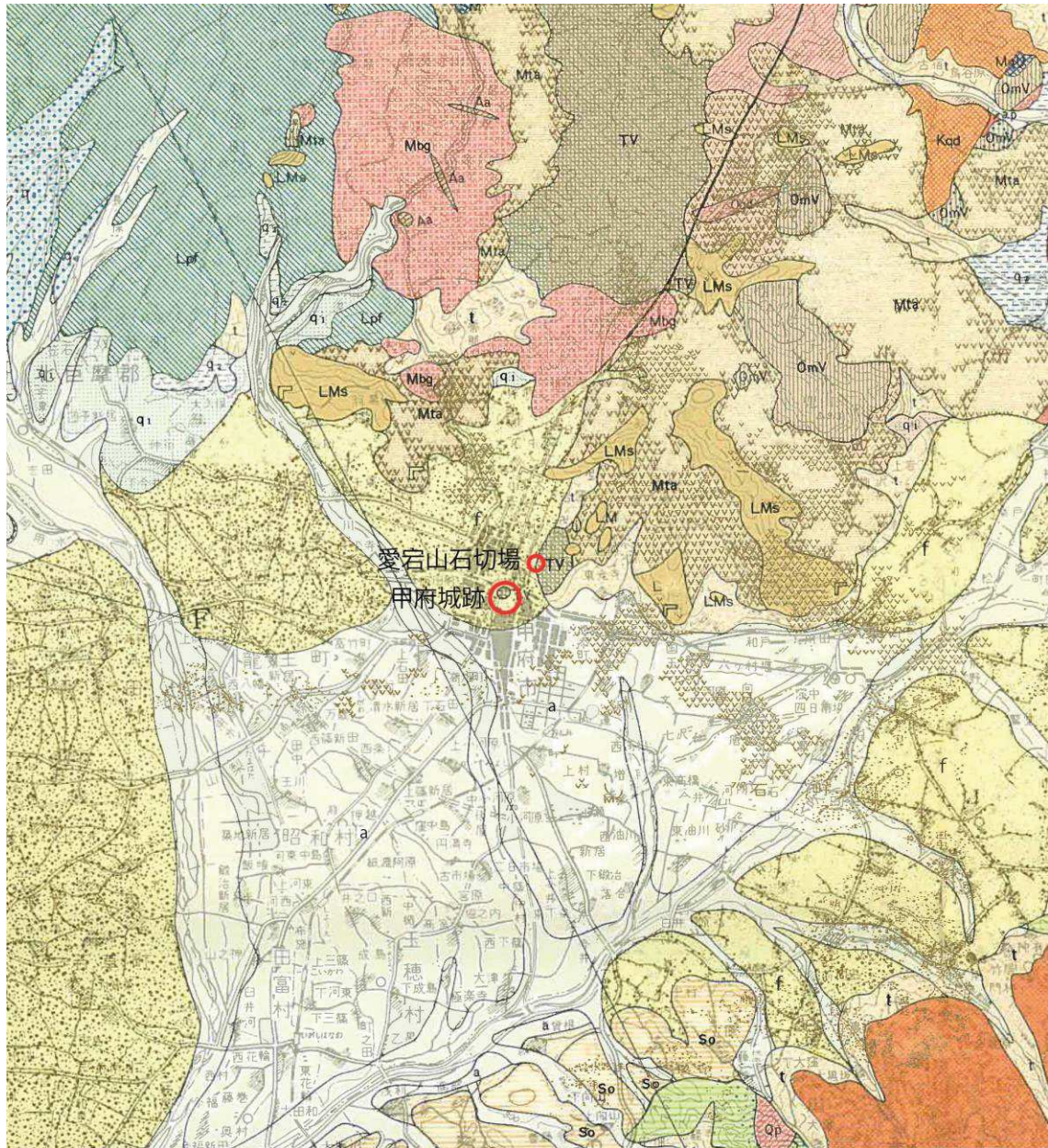
甲府盆地をとりまく山地は、北部が第四紀更新世の黒富士火山及び古八ヶ岳火山岩類（輝石安山岩～石英安山岩）、新第三紀中新世末～鮮新世の水ヶ森火山及び太良ヶ峠火山においては。東部は白亜系の小仏層群（砂岩、粘板岩、礫岩）とそれを貫く新第三紀中新世の花崗閃緑岩で、南部及び西部が火山碎屑岩（安山岩、玄武岩、凝灰角礫岩）を主とする新第三紀中新世御坂統と、第四紀更新世の曾根層群（砂礫、粘土泥流、火砕流）で構成されている。これらは、甲府盆地の基盤として、砂礫層を主体として、粘土層、炭質物の薄層などを含む厚い地層の下に分布している（下表参照）。

本調査地である甲府市丸の内の地質は、既往地質資料（次ページ図）に示される様に、第四紀完新世の扇状地堆積物（地質図記号（以下記号と省略）：f）や沖積堆積物（記号：a）の砂・礫・粘土による堆積物が広く分布する。東方～北方の山地には新第三紀鮮新世の水ヶ森等火山の安山岩（LMs）及び水ヶ森火砕岩類（記号：Mta）、第三紀中新世末の太良ヶ峠火砕岩類（記号：Tv）が分布し、火山噴出物の安山岩及び火山碎屑物が広く分布する。昇仙峡付近などには新第三紀中新世の花崗岩類（記号：Mbg）も分布する。

このように調査地の表層地質は第四紀完新世の扇状地や沖積地堆積物（記号f及びa）の分布地に該当するが、近接する甲府城には愛宕山方向から続く太良ヶ峠火砕岩類（記号Tv）の分布が示されており、完新世の堆積物の下にはこの太良ヶ峠火砕岩類の分布が示唆される。

表 甲府盆地周辺地質層序表

地質時代		地層名	岩層
第四紀	完新世	現河床堆積物	砂・礫・粘土
		沖積地堆積物	砂・礫・粘土
		扇状地堆積物	砂・礫・粘土
第四紀	更新世	黒富士火山噴出物	泥流・火砕流・熔岩
		古八ヶ岳火山噴出物	泥流・火砕流・火山碎屑岩
		曾根層群	砂・礫・粘土・泥流・火砕流
第三紀	鮮新世	水ヶ森火山噴出物	熔岩・火山碎屑岩
		太良ヶ峠火山噴出物	熔岩・火山碎屑岩
	中新世	花崗閃緑岩	花崗閃緑岩
		御坂層群	熔岩・火山碎屑岩
古第三紀		四万十層群	砂岩・粘板岩・千枚岩
		小仏層群	



沖積地堆積層	a	砂・礫・粘土	TV	太良ヶ峠火砕岩類
崖錐堆積層	t	砂・礫・粘土	LMS	水ヶ森、横尾山 砥山複輝石安山岩
扇状地堆積層	f	(比高: 2~30m)	Mta	水ヶ森火砕岩類
低位段丘層	q1	(比高: 5~40m) 富士熔岩流	Kad	小鳥型、芦川型石英閃緑岩
中位段丘層	q2	(比高: 40~60m) 含泥岩層	OmV	大久保火山岩類(三富層)
曾根層群	So	砂・礫・粘土・火砕流	Mbg	御岳型、鳳凰型黒雲母花崗岩
黒富士火砕流	Lpf	角閃石石英安山岩質火砕流		

甲府城周辺地質図



甲府城周辺の地形・地質の状況

(3) 気候

甲府市の気候は、内陸部にあることから、夏には蒸し暑く、冬は寒さが厳しい盆地特有の気候である。令和元年度のデータでは、年間平均気温は 15.9℃、最高気温 37.6℃、最低気温-5.9℃、年間降水量は 1,168.0mm となっている。

近年、温暖化に伴う夏日、猛暑日の増加や短時間および局地的な集中豪雨（ゲリラ豪雨）の傾向が指摘されている。甲府地域においてもその傾向はデータに表れており、日最高気温 25℃以上の夏日、30℃以上の真夏日、35℃以上の猛暑日の年間日数はいずれも 2000 年（平成 12 年）以降が多くなっている。降水量についても、年降水量は特に多くはないが、日最大 1 時間降水量、月最大 24 時間降水量共に 2000 年以降が多い。

こうした気候の傾向を踏まえて、短時間・集中的な雨水への遺構保存対応、夏の来訪者やイベントに際しての施設対応について配慮していく必要がある。

月別気象概況（令和元年度）：出典 甲府地方HP

月／区分	平均気温(℃)	最高気温(℃)	最低気温(℃)	降水量(mm)
1月	3.6	16.0	-5.9	6.0
2月	6.1	19.0	-4.1	33.0
3月	9.6	25.0	-1.1	63.5
4月	13.6	28.8	-0.4	56.5
5月	19.3	35.2	5.5	68.0
6月	22.2	33.7	14.0	134.5
7月	24.8	36.4	18.3	190.5
8月	27.9	37.6	21.8	101.0
9月	25.2	37.1	16.7	63.0
10月	19.1	31.4	11.7	363.5
11月	11.9	24.4	-1.0	33.5
12月	6.9	17.9	-1.8	42.5

観測史上 1 位～5 位の値：出典 甲府地方HP

要素名／順位	1位	2位	3位	4位	5位	統計期間
日最大1時間降水量(mm)	78.0 (2004/8/7)	73.0 (1978/7/8)	62.0 (2011/7/30)	61.0 (1990/9/20)	59.5 (2003/8/5)	1937/1 2020/5
月最大24時間降水量(mm)	294.5 (2000/9/11)	233.5 (2002/7/1)	208.0 (1982/9/12)	205.2 (1961/6/27)	195.0 (2014/10/5)	1950/1 2020/5
月降水量の多い方から(mm)	647.9 (1910/8)	586.0 (2004/10)	582.5 (1935/9)	556.2 (1945/10)	500.5 (2000/9)	1894/8 2020/5
年降水量の多い方から(mm)	1876.3 (1938)	1653.8 (1910)	1652.5 (1991)	1644.5 (1921)	1614.1 (1907)	1894年 2020年
日最高気温25℃以上年間日数	156 (2013)	150 (2018)	150 (2004)	149 (2019)	149 (2005)	1894年 2020年
日最高気温30℃以上年間日数	88 (2013)	86 (2018)	86 (2016)	86 (2004)	86 (1961)	1894年 2020年
日最高気温35℃以上年間日数	34 (2010)	31 (2018)	31 (2013)	31 (1995)	29 (1994)	1894年 2020年